高齢者の豊かな生活のために　　２０２３年２月１日発行

手 賀 沼 通 信（第２９９号）

Ｅメール：nittay@jcom.home.ne.jp　http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/　新田良昭
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai　http://tegatu2.web.fc2.com

今月は弟から届いたエッセイ２編をご紹介いたします。

本人の言葉によると、「最近文章を書くのが苦手となって、もう止そうかと何度も思いますが、止めたら老いのスピードが上がると、何とか続けています」とのことで、いつもより短い内容になっています。

私も同じことを感じています。理由は高齢のためです。私は８６歳、弟は４月末には８５歳となります。

特別寄稿

田んぼを眺めながら　新田自然

９月半ばになると、ここ親水公園を取り囲む田んぼにも、稲刈りの準備が始まる。引地川上流の堰が閉じられ、用水路から水が消える。だんだんに田んぼの土は乾燥し、ひびが入る。茎から水気が抜け、「藁色」になってきたら、稲刈りのゴーサインだ。

穂が黄金色を増し、畔には彼岸花が咲いて紅い。刈り取った稲は稲架（はさ）に架けられ、赤とんぼがその間を行ったり来たり…と、これが従来の秋の稲作風景であった。

しかし、今の田んぼは様子が違っている、ほとんどの田んぼは、稲架掛けして乾燥させないのだ。いきなりコンバインがやって来て、刈り取ってしまうのだ。稲はその場で脱穀し、籾と藁に分離、藁は束となって並べられる。籾は乾燥され、後日農家に戻ってくる。

いわゆる専業農家では、もっと他のやり方があるのかもしれないが、こういったやり方が、このあたりの兼業農家での一般的なやり方だそうで、人手不足の中、機械化と省力化が進む、まあそれはそれで仕方がない。

今年は田植えから稲刈りまで、じっくり眺めて来た。いろんな人たちから話を聞きながら、一日一日、稲が延び育ってゆくのを見るのは楽しいことであった。

ここにもう一人、私と一緒に眺めてきた人がいる。鈴木さん、８６歳、私より２才も上、そして私以上に熱心に、稲を眺めてきた人がいる。

鈴木さんは山形の朝日連峰山麓の農家の生まれである。１０人兄弟の６番目、次男坊である。「貧乏百姓でよ、兄貴だけ死んじまって、あとはみな元気だ」鈴木さんの喋りは、田舎の言葉と、その後に移り住んだ地域の言葉が入り混じって、わかりにくいところがある。

ふるさとは雪深いところで、昔は２メートルくらい降った。家は藁屋根で、暖は囲炉裏でとった。戦後のこととて、いまのように機械で雪かきをすることもなかった、雪に階段を作って家の出入りをしていた。中学校まで行ったが、高校は遠かったので行かなかった。米作りは２０歳ころまで手伝ったが、次男坊のため家を継ぐわけにもいかず、独り東京に出た。昭和３０年初頭のころだった。その頃の東京は道路ブームで、近郊の道路づくりをやった。その後重機の運転や電気工事の仕事に就き、定年で職を辞し現在に至っている。今は奥さんと二人暮らし、「足が不自由だが、なんも言うことはない」と。

なにか鈴木さんの生い立ちの話になったが、本当は米作りをしたかったが、次男坊であったため、それが果たせなかった、そこに鈴木さんの米作りに対する愛着、執念を垣間見たように感じたので触れた。

５月、田植えしたばかりの田んぼはみずみずしい。鈴木さんはたぶん朝日連峰の雪を思い浮かべているのだろう、「この頃の田んぼが一番いい」。そんな言葉を３回くらい聞いた。田植えのとき、稲の花の咲いたとき、稲刈り直前、いつもこの言葉を吐いた。たしかにどの時分の田んぼも美しい。